

**家持二季歌の手法 「しかすがに」と逆接の助詞
「を」をめぐって**

著者	石田 正博
雑誌名	國文學
巻	83-84
ページ	40-49
発行年	2002-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/2475

家持二季歌の手法

——「しかすがに」と逆接の助詞「を」をめぐって——

石田正博

一 問題提起

A うち霧らし 雪は降りつつ しかすがに 我家の園に うぐ

ひす鳴くも (巻8・一四四一 春雑歌)

B 三島野に 霞たなびき しかすがに 昨日も今日も 雪は降

りつつ (巻18・四〇七九)

C 月数めば いまだ冬なり しかすがに 霞たなびく 春立ち

ぬとか (巻20・四四九二)

右の三首は、大伴家持が「しかすがに」なる句を用いて詠んだ歌であり、一見して明らかかなように、いずれも〈冬〉と〈春〉という

二季の景が詠まれている。

家持には、他にそうした二季の景を詠んだ歌が、

D み死生の 竹の林に うぐひすは しき鳴きにしを 雪は降
りつつ (巻19・四二八六)

の如く存在する。右のAとCとDに対する諸注の解は、ともに〈冬〉と〈春〉の風物が交錯したさまを詠んだものとし、これら四首の発想に類似性を認めている。^(註10)

確かに右の四首は、〈冬〉と〈春〉の交錯を詠んでいるという意味では現行諸注の説く通りである。けれども諸注は、おおむねAとCの「しかすがに」を、Dの逆接の接続助詞「を」と同様に単なる逆接の接続詞と解しており、両者の意味の相違に格別の注意を払っているとは言い難い。^(註11)つまり、家持が同じ〈冬〉と〈春〉の二季を詠む上で、何故かかる二様の詠み方を必要としたのかについての考察が、まだ十分になされていないと思われるのである。

それ故本稿では、従来単なる逆接と解されてきた「しかしがに」の表現的様相を再検討することを通して、二季の交錯する様を詠むに際し、かかる二様の詠み方を必要とした家持の内面の言語場における対象把握のありようを探ってみたい。

二 〈二季併存歌〉に見られる逆接性

論の展開上、まずDにおける「を」の逆接性について確認しておきたい。

Dは「(正月) 十二日に、大雪降り積みて尺に二寸あり。因りて拙懐を述ぶる歌三首」(19・四二八五〜八七) 中の一首であり、その第四句までに御苑の竹林に鳴く「うぐひす」という〈春〉の景が詠まれ、「を」を介して第五句では「雪は降りつつ」と〈冬〉の景が詠まれている。

この接続助詞「を」は、順接逆接いずれの条件も表すが、集中ではその大半を逆接が占め、Dもまたその例に漏れず〈冬〉と〈春〉の二季を逆接の関係で結んだ歌と解される。

かかる〈冬〉と〈春〉の二季を逆接で結び一首を成す歌は、Dの他にも次のような例が見出される。

ア霜雪も いまだ過ぎねば 思はぬに 春日の里に 梅の花見

つ (巻8・一四三四 大伴三林 春雑歌)

イ山の際に うぐひす鳴きて うちなびく 春と思へど 雪降りしきぬ (巻10・一八三七 春雑歌)

ウ山の際の 雪は消ざるを みなひあふ 川の沿ひには 萌えにけるかも (巻10・一八四九 春雑歌 詠柳)

アは、まだ「霜雪」が残る〈冬〉と「春日の里」に咲く「梅の花」の〈春〉という二季の景が、助詞「に」を介して詠まれている。本来「に」は、場所や時間の一点を指す助詞であるが、アの場合その前件「霜雪」と後件「梅の花」が一般的に同時に存在し難いと考えられるが故に逆接と解される。イは、「山の際」に鳴く「うぐひす」の声から〈春〉の到来を思う前件と、「雪降りしき」る〈冬〉の景を詠む後件が、逆接の助詞「ど」を介して一首を成す。またウはDと同様、逆接の接続助詞「を」を介して遠景の「山の際」に残る「雪」の〈冬〉と、「川の沿ひ」に芽吹いた柳の〈春〉という二季を詠む。このように右の三首は、「に」「ど」「を」の如く、接続を担う助詞に相違があるものの、全て二季の関係を逆接で捉えた歌であり、かかる歌を本稿では以下〈二季併存歌〉と略称する。

さてここで注目すべきは、これら〈二季併存歌〉には、逆接の助詞とともに、アの「思はぬに」のように、新たな季節の到来をこれまで作者が認識していなかったことを示す表現や、イの「春と思へど」のように、作者が既に新たな季節を自覚していたことを示

す表現が見出されることである。つまり、〈二季併存歌〉は、作者が当初の季節認識とは相違する季節の景（順行・逆行ともに）を発見した際に覚える感興が、その発想の原点にあると言える。それ故に〈二季併存歌〉の主意は、思えば当然のことながら、作者の当初認識していた季節が詠まれる前件よりも、逆接を介してその認識とは相違する新たに発見した季節が詠まれる後件にその比重が存在していると考えられる。

右に確認した〈二季併存歌〉の表現的特徴は、前掲Dにもそのまま当てはまる。即ちDは、確かに諸注が述べる如く、〈春〉と〈冬〉の交錯した様が描かれているけれども、その一首の主意は、右に述べた〈二季併存歌〉の表現的特徴を思えば、「うぐひす」がしきりに鳴く〈春〉の景の中で、後件に詠まれた、その春を思うべくもない「雪」に焦点が当てられた歌と考えるべきであろう。そのことは、Dの題詞に「大雪」に対する「拙懐を述ぶる」とあることによっても保証される。

三 「しかれども」の表現性

前節に論じた〈二季併存歌〉の主意のありようは、言うまでもなく逆接という接続それ自体が持つ性質である。またかかる後件への主意の傾斜は、前件を未完結のままにして後件と関連づける接続助

詞よりも、前件と後件との間を断絶させ、対立させた上で両者の関係を明示する接続詞の場合により明確に現れる。

上代における逆接の接続詞には、「しかすがに」と同じく指示副詞「しか」を含みつつ、その後動詞「あり」、逆接の助詞「ども」が続く「しかれども」なる句があり、その用例は集中十四例を数える。⁽⁵⁶⁾

I 恋といへば 薄きことなり しかれども 我は忘れじ 恋は死ぬとも (巻12・二九三九 寄物陳思)

II はろはろに 思ほゆるかも しかれども 異しき心を 我が思はなくに (巻15・三五八八 遣新羅使歌群 贈答)

III 我が待ちし 秋は来りぬ しかれども 萩の花そも いまだ咲かずける (巻10・二二二三 秋雑歌)

IV もみち葉の にはひは繁し しかれども 妻梨の木を 手折りかざさむ (巻10・二一八八 秋雑歌)

右の掲出例中、Iでは、その前件で相手への想いを「恋」という言葉で言ってしまうと「薄きこと」に聞こえてしまうという世間一般の認識が詠まれ、作者も「しかれ」で前件の内容を認めながらも、「ども」によって導かれた後件では、そうした認識とは異なった「我」なる作者個人の、相手に対する想いの強さが詠まれている。つまりIの主意は、作者個別の想いを表出する後件にある。

IIは、心を寄せる相手との別離後の距離が遙か遠くに思われるという前件に対して、「しかれども」を介した後件では、そうした前件から一般的に想起される「異しき心」を抱くということをも、「我が思はなくに」と否定する「我」なる作者の個別的意志が詠まれているのであり、その主意は言うまでもなく後件にある。

III、IVは先の二例の如く「我」なる語を後件に含まないが、IIIでは待ち望んでいた「秋」の到来を詠む前件に対し、後件ではその季節になれば開花するはずの「萩の花」がまだ咲いていないことに対する、作者のいぶかしみにも似た気付きが詠まれている。また、IVでは、前件に「もみち」した葉の多種多様にある様が詠まれているのに対し、後件では、「妻梨の木を手折りかざさむ」の如く、そうした中でも「妻梨の木」なる特定の「もみち葉」を選び取るようにする作者個別の意志が助動詞「む」によって表現されている。即ち、これら二首も、前件とは異なる作者個別の認識や判断が表出されている後件にその主意が存在している。

では、こうした「しかれども」と同様に逆接の接続詞と捉えられていた「しかすがに」にも、右に述べた如き逆接性が見出されるのであるうか。

四 「しかすがに」の表現性

以下に、第一節に掲げたA〜C以外の「しかすがに」の例を挙げ

- ① … 草枕 旅を宜しと 思ひつつ 君はあるらむと あそそ
には かつは知れども しかすがに 黙もえあらねば 我が
背子が 行きのまにまに 追はむとは 千度思へど …
- ② 荒磯越す 波は恐し しかすがに 海の玉藻の 憎くはあら
ずて (巻7・一三九七 譬喩歌 寄藻)
- ③ 妹と言はば 無礼し恐し しかすがに かけまく欲しき 言
にあるかも (巻12・二九一五 正述心緒)
- ④ 梅の花 散らくはいづく しかすがに この城の山に 雪は
降りつつ (巻5・八二三 大伴百代)
- ⑤ うちなびく 春さり来れば しかすがに 天雲霧らひ 雪は
降りつつ (巻10・一八三二 春雑歌)
- ⑥ 梅の花 咲き散りすぎぬ しかすがに 白雪庭に 降りしき
りつつ (巻10・一八三四 春雑歌)
- ⑦ 風交じり 雪は降りつつ しかすがに 霞たなびき 春さり
にけり (巻10・一八三六 春雑歌)

⑧山の際に 雪は降りつつ しかすがに この川柳は 萌えに
けるかも (巻10・一八四八 春雑歌 詠柳)

⑨雪見れば いまだ冬なり しかすがに 春霞立ち 梅は散り
つつ (巻10・一八六二 春雑歌 詠花)

(筆者注 ①～③は人事詠、④～⑨は自然詠)

右の「しかすがに」の用例と前節で見た「しかれども」の用例を比較した場合、注目されるのはそれぞれの前件のありようである。

即ち「しかれども」は、その前件が全て終止形あるいは体言を取るのに対し、「しかすがに」の前件には、①の「かつは知れども」の如く逆接の接続表現が見出される。また⑤の「春さりくれば」も木下正俊氏の分析によれば偶然確定条件の反予期性に区分される接続表現であり、これも逆接の意味合いが強い^(註5)。つまり、もし「しかすがに」を単なる逆接の接続詞と捉えるならば、①⑤のそれは、前件で示された逆接表現を「しか」で受けつつ、そこにさらに逆接を重ねることになり、一首の意味の構造に齟齬をきたすことになろう^(註6)。かかる「しかれども」と「しかすがに」に見られる前件の表現的様相の相違が、「しかすがに」を単なる逆接の接続詞と解釈することへの疑念を抱かせる。

またかかる疑念は、「しかすがに」の語構成を分析することからも生じてこよう。「しかすがに」の語構成については様々に説かれ

てきたが、^(註7)現在では中称の指示副詞「しか」、サ変動詞「す」に、助詞「がに」が続いた語であると考えられている。この助詞「がに」は、

a 秋田刈る 仮慮もいまだ 壞たねば 雁が音寒し 霜も置き
ぬがに (巻8・一五五六 忌部黒麻呂 秋雑歌)

b うれたきや 醜ほととぎす 今こそば 声の囀るがに 来鳴
きとよめ (巻10・一九五一 夏雑歌 詠鳥)

において、aでは「雁が音」の寒さを「霜も置きぬがに」と示し、またbでは「今こそば鳴きとよめ」で欲しいと思う「ほととぎす」の鳴き声の程度を「声の囀るがに」と示すように、対象に対する作者の判断や要求の程度を、それとは別の動作や様態の程度で比喩的に表現する。つまり「しかすがに」は、「しか」「す」によって前件の内容を受け止めつつ、その後程度副詞句を作る「がに」が加わることで、「しか」「す」が受け止めた前件とは別に、それと同程度に存在する後件を導く句であると考えられる。ただ、助詞「がに」の形成する副詞句では実際は成立していない比喩的な事柄が詠まれるのに対して、「しかすがに」は、「しかす」で前件の内容を既に成立している事柄として受け止める。即ち「しかすがに」は、その語構成から前件と後件に詠まれた二つの事柄がそれぞれ同時同程度に存在している状態を表すということを、その表現的特徴として指摘

できるであろう。また、かかる「しかすがに」の構成要素には、「しかれども」の「ども」の如き逆接を表す語が見当たらない。それ故「しかすがに」は、その本来的語性としては逆接としての意味を有していなかったものと考えられよう。

かかる語性を有する「しかすがに」が、では何故逆接的な意味で解されてきたのか。そのことについては、例えば③では、その前件に愛恋の情を寄せる女性に対して「妹」と呼ぶことが「無礼し恐し」という作者の負い目にも似た自覚が詠まれ、後件には「かけまく欲しき」という止み難い欲求が詠まれており、かかる前件の意味範囲には後件が内在し得ないと一般的に判断されよう。つまりこうした前件と後件の意味的な異なりから、これらを結ぶ「しかすがに」に逆接の氣息が読み取られてきたと考えられる。

以上の如く、「しかすがに」はやはり単なる逆接を示す接続詞ではないと解することができよう。とするならば、「しかすがに」によって二季の景が捉えられたA↪Cには如何なる表現世界が構築されているのであろうか。この問題を、同じく「しかすがに」を用いて二季を詠んだ歌(④↪⑨、以下△「しかすがに」季節歌)と略称する)を検討することを通して考察し、また家持が二様の季節を詠むに際して、かかるA↪CとDという二様の詠み方を必要とした、その内なる言語場における対象把握の内実を明らかにしたい。

五 家持の「しかすがに」歌

④梅の花 散らくはいづく しかすがに この城の山に 雪は降りつつ

⑤うちなびく 春さり来れば しかすがに 天雲霧らひ 雪は降りつつ

⑥梅の花 咲き散りすぎぬ しかすがに 白雪庭に 降りしきりつつ

⑦風交じり 雪は降りつつ しかすがに 霞たなびき 春さりにけり

⑧山の際に 雪は降りつつ しかすがに この川柳は 萌えにけるかも

⑨雪見れば いまだ冬なり しかすがに 春霞立ち 梅は散りつつ

右に再掲した△「しかすがに」季節歌は、④↪⑥が前件に△春、後件に△冬を詠み、⑦↪⑨が前件に△冬、後件に△春を詠む。これらの歌は④の「散らくはいづく」の如く、待ち望む△春の出現に驚き、その△春の場を問い求める表現や、⑦⑧に気付きの「けり」が見られることから、△二季併存歌と同様、二季の同時出現に対する驚きが一首の根本にあると言え、そのことは右に掲げ

た全例に同時進行を表す助詞「つつ」が見られることから証されよう。

ただ、〈二季併存歌〉の主意は新たに発見した季節を詠む後件に存在した。けれども、前節に述べた如く「しかすがに」は、前件と後件が同時同程度に存在していることを示すところにその表現的特徴があった。従って、例えば⑨は、前件に「雪」から認定される〈冬〉、後件に「霞」が立ち、「梅」が散る〈春〉を詠むが、この二季のどちらか一方に焦点を絞っているのではなく、二季がともに同時同程度に共存している状態を詠んでいると言える。つまり、〈しかすがに〉「季節歌」には、前件と後件に詠まれた二季が同時同程度に出現している状態それ自体に対する感興が詠まれているのである。またこうした表現性こそが、後件に主意が傾く〈二季併存歌〉と相違する「しかすがに」特有の表現性と考えることができるであろう。

かかる〈しかすがに〉「季節歌」の表現的特徴を踏まえて、家持のA〜Cの意味を再検討したい。

まず、本稿が〈しかすがに〉「季節歌」の特色が最も端的に現れていると考えるCから論じたい。Cは、その題詞によれば天平宝字元年（七五七）十二月二十三日に「治部少輔大原今城真人の宅に^{（注⑩）}て宴」した時の歌である。当年は十二月十九日が立春に当たる故、

宴当日は、年内でありながら立春を過ぎた年内立春の範疇にあつた。かかる宴席で家持が披露したCは、その年内立春を主題として、前件に「月数めばいまだ冬なり」と詠み、後件に「春立ちぬとか」と詠んでいる。^{（注⑩）}言うまでもなく年内立春とは、同一の暦日に暦月的には年内の〈冬〉、節月的には立春後の〈春〉、という異なった二様の季節が併存するところにその興趣がある。それ故、かかる年内立春の〈冬〉〈春〉を〈二季併存歌〉の如く逆接で表現してしまうと、歌の主意が後件の季節に傾くため、年内立春の興趣を正確に詠み出したことにならない。つまり年内立春を詠むというこの宴の趣向からすれば、Cには、〈冬〉と〈春〉の二季が等しく併存する状況が詠まれる必要があつたのであり、その点にこそ、二様の異なる事態が同時同程度に存在することを詠出し得る「しかすがに」なる句が、用いられる必然性が存在したと言えるであろう。また、こうした「しかすがに」の用い様から、同時同程度に現れた年内立春の〈冬〉と〈春〉を、まさしく同時同程度のものとして把握しようとする家持の内なる世界における対象把握のありよう、即ち家持の対象へのまなざしを窺うことができるであろう。

かような家持の対象へのまなざしは、ABにも見て取ることができよう。即ちAは、従来「しかすがに」が逆接の接続詞と解されてきたことから、後件で「うぐひす鳴くも」と詠まれた〈春〉に一首

の感興があると受け取られ、「冬から春へと推移した喜び」が詠まれた歌として解されてきた。確かにAに対するかかると解釈は、その題詞に「大伴宿禰家持の鶯の歌」とあることから一応は了解されよう。ただそうした場合、Aの主意は、従来の解釈では後件の「うぐひす」の声だけに存在することになる。しかし、前述した「しすがに」の表現性、即ち二様の異なった対象が同時同程度に存在することそれ自体に対する感興が表出されることを思えば、こうした従来の解釈に疑問が持たれよう。なぜならば、家持が二様の季節のどちらかに重心を置いて表現したならば、「しすがに」よりも「しかれども」の如き逆接を介した方がより明瞭に表現されるように思われるからである。しかし、家持はAに「しかれども」ならぬ「しすがに」を用いた。それ故Aには、他の何ものでもない「しすがに」なる句が用いらねばならなかった必然性を踏まえた解釈が求められよう。即ち、Aにおいて家持は、「雪は降りつつ」「うぐひす鳴くも」といった自身を取り巻く〈冬〉と〈春〉という二様の季節を、その内なる言語場において、どちらか一方の季節に重きをおいて眺めていたのではなく、それぞれの季節を同時同程度に等しくあるものとして把握していたと考えられる。つまりAは、「我が園」に「うぐひす」が鳴く〈春〉が出現したことを喜びつつも、そのことだけに焦点を絞るのではなく、そうした〈春〉の景が「雪

が降りつつ」ある〈冬〉の景と同時同程度に存在している状態それ自体に対する感興を詠んだものと解すべきであろう。かかる家持の内面における二季の景の等質性は、その主意が後件に傾く「しかれども」の如き逆接では決して表現し得ないものであり、その点にこそAに「しすがに」が用いられる必然性があつたと言えるであろう。

またBは、越前国の掾に転出した大伴池主の来贈歌三首（巻18・四〇七三―七五）に対する報贈歌四首（四〇七六―七九）の第四首目に当たる。これまでBは、その後件に「雪は降りつつ」と〈冬〉の景を詠むことから、家持が季節の運行に朔行する〈冬〉の景に池主との別離の悲しみを託したと解されたりもした。けれどもこれまで述べてきた〈しすがに〉季節歌の表現性からすれば、BもまたAと同様に、越中国府南方に広がる「三島野」に霞がたなびく〈春〉の景と、昨日から雪が降り続く〈冬〉の景とが同時同程度に出現していることそれ自体に対する感興が詠まれたものと解される。かかる越中国府から眺望される二季の交錯する風景は、以前越中掾であつた池主も慣れ親しんだ風景であつたと思われる。即ちBは、決して二人が離れてあることの悲しみを詠んだ歌ではなく、池主がその来贈歌三首の序に「深見村に到来し、彼の北方を望拝する」と述べた家持への思いに対して、〈冬〉と〈春〉が同時に出現する、

池主にもなじみ深い現在の越中の風光を詠むことで応えた歌として捉え直すことができるだろう。

かかるBに表現された二季の景は、「三島野に霞たなび」くといふ遠景の〈春〉と、「雪」が降る近景の〈冬〉の如く、実際の風景としてはその距離感に相違がある。けれども、家持の感興はそうした二季の景の遠近感にあったのではない。つまり家持は、越中国府から眺望されるこうした二季の景を、実景に存する遠近感にとらわれることなく、自身の内なる言語場において同時同程度に現れたものとして等しく把握していたと言える。即ち家持は、Bにおいてかかる外面の言語場における二季のありようをその前件と後件に詠みつつも、その関係を「しかれども」の如き逆接で捉えるのではなく、同時同程度に併存することを示す「しかすがに」を選択することによって、自身の内面の言語場に構築した二季の景のありようを、正しく歌に反映させていたと言える。

以上、家持二季歌に見出される、A〜Cの如き△しかすがに「季節歌」と、Dの如き△二季併存歌」という二様の詠み様は、思えば当然のことではあるが、家持の内なる言語場における対象把握の相違をそのまま反映したものであったのである。つまり家持は、同時に現れた〈冬〉と〈春〉という二季の景を詠むに際して、新たに発

見した季節に感興を覚えた場合には、その感興を後件に置く逆接を用いた△二季併存歌を詠み、一方その二季が同時同程度に現れていることそれ自体に感興を覚えた場合には、その同時同程度性を表し得る△しかすがに「季節歌」に詠み分け、その時々自身の感興を的確に歌に反映させていたと考えられるであろう。

(注)

①『古典集成五』、巻19・四二八番歌、『全注巻十九』（青木生子氏）同番歌の項など。

②『旧大系』は「しかすがに」を「それはそれとして」と転換として解する。しかしながらそう解すると、前件と後件の関係が希薄となり、一首の意味的緊密性が弱くなるため従い難い。

③「しかれども」の用例は、掲出例の他に、巻2・一九九、巻6・九六六、巻7・一二三二、巻12・二九八五、巻13・三二五〇、同・三二五三、巻16・三八一五、巻17・三九四八、巻18・四〇九四、巻19・四二〇七。

④巻15・三五八八は、作者の性別について男女両方の説がある。この点については大演眞幸氏「道新羅使人悲別贈答歌十一首の構成」『萬葉』第九十七号、S 53・6に詳しい。

⑤「条件法と呼応」『万葉集語法の研究』塙書房、S 47・9

⑥井上博嗣氏「古代語「さすがに」の意味について―その云わゆる逆接の意味なる―」（『国語国文』第四六巻第五号―五十三号―S52）に、「しかがに」そのものに逆接の意味を見出す点で本稿と立場を異にするものの、「しかがに」歌前件の接続表現に対し疑問を呈している。

⑦『総釈』（巻八、藤森朋夫氏）巻8・一四四一番歌、窪田『評釈』同歌の項は、「しかするからに」の約と捉え、『旧大系』巻5・八二三番歌補注では「しか」「す」に、場所を表す「が」、助詞「に」が続く形と捉える。

⑧当該歌における「しかがに」の表現性については、拙稿「梅花宴大伴百代歌の意匠」（『萬葉』第一七八号、H13・10）に論じた。

⑨『日本曆日総覧 具注曆篇 古代中期2』（大谷光男氏他共編、本の友社、H5・4）による。

⑩家持の曆日意識について論じたものは、関守次男氏「大伴家持の季節感と曆法意識」（『山口大学文学会誌』第十五巻第一号、S39）、新井栄蔵氏「万葉集季節観考―漢語〈立春〉と和語〈ハルタツ〉―」（『万葉集研究 第五集』塙書房、S51・7）、田中新一氏「二元的四季観の発生と展開（古今集まで）」（『平安朝文学に見る二元的四季観』H2・4、風間書房）、大濱眞幸氏「大伴家持作『三年春正月一日』の歌―『新しき年の初めの初春の今日』を

めぐって―」（『日本古典の眺望』、桜楓社、H3・5）など多数ある。

⑪『釈注四』、巻8・一四四一番歌の項参照。

⑫『釈注九』、巻18・四〇七九番歌の項参照。

付記 本稿は関西大学国文学会（二〇〇二年七月）での発表をもととします。研究会の席上、多くの方々からご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

（いしだ まさひろ／本学大学院生）